P2-034

道具の違いによる乳幼児の水分摂取時の 下顎運動に関する縦断研究

刑部月1、石崎晶子1、大杉佳美2、板子絵美2、 大岡貴史3、弘中祥司1

昭和大学 歯学部 スペシャルニーズ口腔医学講座 口腔衛生学部門、 ピジョン株式会社 中央研究所、 明海大学 歯学部 機能保存回復学講座 摂食嚥下リハビリテーション学分野

P2-035

父親の育児ストレスとソーシャルサポー トに関する文献検討

尾近 千鶴、藤澤 真沙子、菊地 珠緒

川崎市立看護短期大学

【目的】

乳幼児期は摂食機能発達が著しい時期であり、成人嚥下や 咀嚼機能獲得とともに水分摂取様式も哺乳動作から変化す る. 本研究では、乳幼児期の道具の違いによる水分摂取に 関する下顎運動の発達変化の解明を目的として、乳児の水 分摂取時の下顎運動について縦断的観察を行った.

【対象と方法】

対象は健康な生後11か月の乳児12名 (男児7名, 女児5名) とし、18か月まで月1回の頻度で水分摂取の様子を評価、撮 影した. 撮影には、外部観察評価のための家庭用ビデオカ メラ2台用と、下顎運動の移動距離計測のための三次元動作 解析カメラ2台を用いた. 解析対象点はオトガイ部(A)と 顎下部(B)とした.水分摂取に用いた道具は,市販の乳児 用スプーン,スパウト,ストロー,トレーニングコップ(以 下コップ)の4種類とし,各道具が口腔内に挿入された長さ を計測した. 研究実施に際しては、昭和大学歯学部医の倫 理委員会にて承認を得た(承認番号:2014-028).

【結果】

各道具を用いた水分摂取時のオトガイ部(A),顎下部(B) の平均移動量は、生後11か月ではスプーン(A)2.19cm(B) 2.09cm, スパウト (A) 1.81cm (B) 1.80cm, ストロー (A) 1.85cm (B) 1.88cm, コップ (A) 2.29cm (B) 2.20cmであっ た. 18か月ではスプーン (A) 2.20cm (B) 1.76cm, スパウト (A) 0.66cm (B) 0.53cm, ストロー (A) 0.45cm (B) 0.39cm, コップ (A) 0.94cm (B) 0.83cmであった. また, 口腔内に挿 入された道具の長さは月齢間での変化は見られず,8ヶ月間 の平均は、スプーン1.7±0.6cm、スパウト3.0±0.3cm、スト ロー 2.5 ± 0.3 cm, コップ 2.0 ± 0.5 cmであった.

生後11か月と18か月の各道具の移動量を比較すると、ス プーン以外の道具では移動量が減少した. これはこの月齢 間において頭部,顎が安定されてゆくのではないかと考え られた. また, スパウト, ストロー, コップは口腔内に道具が 一定長挿入されることにより,姿勢,頭部,顎が安定し, 早い月齢から簡単にこぼさず自分で上手に飲むことができ ると考えられた. スプーンは他の道具に比べて児の能動的 な動きが促されやすいため、上手に飲むためには練習が必 要であると考えられた. 更に、水分の量の調整やスピード など、介助者の技術に影響を受けると考えられた.従って、 水分摂取機能の発達を促すには、スパウトやストローだけで なく, 頭部, 顎の安定から, スプーンやコップ飲みの練習を することがより適していると考えられた.

【目的】

父親の育児ストレスとソーシャルサポートに関する文献を 検討し、研究の動向から今後の課題を明らかにする。

【方法】

医中誌をデータベースとし、「父親の育児」「ストレス」を キーワードに2001年から2015年までの文献検索を行い、 41件の文献を得た。このうち1) 重複文献の除外、2) 父親 対象の研究、3) 日本での研究、4) 健康な子供をもつ父親 を条件とした9件に絞り、父親の育児ストレスについてまと めた。そこから父親の育児ストレスとソーシャルサポート の関係をみた5件について研究の動向を分析し、今後の課題 を検討した。

【結果】

5件の文献は、0歳から7歳までの主に乳幼児を持つソーシャ ルサポートを受けた父親を対象とし、質問紙を用いた調査 方法であった。また「父親への教育プログラムを実施し効 果を見たもの」4件、「父親の育児サークル参加の効果を見た もの」1件に分類された。これらのうち「ストレス測定尺度」 と「父親になることによる発達尺度」の両方を用い効果を みたものが2件、日本語版育児ストレスインデックスを用い 効果をみたものが1件、育児・家事時間、性役割観と子ども 観の経時変化をみたものが1件だった。結果は、4件とも教 育プログラムによる介入で父親の育児ストレスの軽減がみ られた。プログラムを3回以上行った場合に育児ストレスが 有意に低下していたものが1件、母親が産院を退院した1か 月後の「父親の家事時間」に有意差があったものが1件だっ た。「父親の成長」「育児の自立」などで6ヶ月後・1年後に、 より効果がみとめられたものが2件、「父親の居場所・仲間 意識」に関するものが2件だった。また、育児支援サークル の効果をみた1件からは、「父親の仲間作り」「子育て中のリ フレッシュ時間」「性別役割分業」「父親の成長」が抽出され た。一方で、父親は世話役割と仕事との葛藤があることも 示唆されていた。以上、分析からソーシャルサポートを通 じて、父親は育児ストレスを軽減したり、父親としての成 長をとげていくことが示唆された。

【考察】

育児ストレスとソーシャルサポートの関係をみた研究は試 作の段階を経て徐々に増えている。研究の課題として、対 象が少なく一般化するには限界があること、父親のストレ ス軽減や、父親としての成長をはかれるようなソーシャル サポートのプログラム内容や介入時期についての検討が必 要であることが明らかになった。